

◇1997年度 浦野環境教育奨励金 活動報告

若手環境教育実践者の育成

三浦半島自然保護の会「青空教室」
金田正人

1. はじめに

野外教育の価値の認識が高まりを感じさせる昨今。一方で、子どもたちにとっての「環境」「自然」が子どもたちの生活や遊びから引き離され、学校教育や報道による「知識」としてしか受け取られていないのではないかと、という不安を感じる。

「ガキ大将」の不在、「異年齢集団」の欠如のまま大人たちから伝えられる環境概念が今日の子どもたちに「環境」「自然」を机上の知識にとどめているのではないかと考えた。

今回、実施した子ども向けの自然観察会「青空教室」では、高校生を運営の中心とした野外活動を行なう事で、子どもたちが子どもたち自身の背の高さで、野外活動における原体験を得、また高校生たちには、次世代の環境教育実践者としての資質を培うことを目的とした。

2. 青空教室

青空教室の会員（参加者）は、小学5年生から中学校3年生までの定員30名とした。募集は神奈川三浦半島で、過去40年間、毎月、自然観察会（一般向け）を開催しつづけている実績を持つ「三浦半島自然保護の会」の会報によって呼びかけた。リーダー（高校生）は当会と（財）日本自然保護協会自然観察指導員東京連絡会が主催する子ども向け自然観察会、こどもくらぶ飛ぶ教室のOBにも個人的に呼びかけた。

実施は、1997年2月から1998年2月の隔月、全7回開催した。会員には、全回の出席を原則としたが、これは、ひとつ処の自然を幾度も見続けることによる発見と地域への愛着を促がすことを目的としたものであり、前出、こどもくらぶでの前

例に習ったものである。

1997年1月から高校生リーダーは、準備を始め、以降毎月1回以上の集まりを現地で持った。

準備および開催に、社会人がスタッフとして参加し、高校生リーダーの教育などに努めた。

社会人約10名、高校生リーダー10名、会員の小中学生約20名が「青空教室」の構成人員である。

3. 開催状況

第1回目の準備（1997年1月）は、自然観察会を開催する主旨に関して、スタッフとリーダーで確認した。すなわち「自然を大切に思う気持ちを育ぐむ」「知識ではなく体験によってそれを培う」という2点にまとめられる。それを基にしてスタッフから各回のテーマの案を提示し、それにもとづいて高校生リーダーによってテーマを検討、プログラムを立案した。

（各回のテーマ）

1. 自然とのつきあい方を学ぼう
2. じっくりと観よう
3. 様々な時間に観よう
4. 自然の中での生活
5. 人と関わりのある自然
6. 季節を通した自然観察
7. 自然保護につながる自然観察

（プログラムの主な点）

1. ネイチャアゲーム、5感を使った観察
2. タイドプールの観察、グループスケッチ
3. 野宿、ホテルの観察
4. ウォークラリー、野宿
5. 田んぼの生きもの調べ
6. 塩づくり、タイドプールと海の比較
7. 青空教室環境会議

毎回の下見（準備）時には、スタッフの（財）日本自然保護協会自然観察指導員を中心に野外活動における安全確保や自然解説（インタープリテーション）などについて、リーダーに指導した。

実際の開催で、リーダーたちにとって、小中学生をまとめるのが最初の難関となったようだった。安全のための指導時に注意力、集中力を欠く子どもにも苦勞していたが、互いの人間関係の形成によって克服していった。また、多くの子どもたちがリーダーの自然への知識の不足に不満を感じたり、リーダー自身もそのことによって自信を喪失したりしていたが、リーダーと会員が一緒に調べていくように心がけさせると、小中学生も、高校生にも自ら調べ観察していこうという姿勢が身についていった。

4. 実践を終えて

一期（全7回）を終えての反省会は、スタッフ

ではなくリーダー自らが呼びかけ開催された。野外活動を実施する注意点や感想が積極的な議論によって取り交わされたが、特に印象的だったのはめざましい自主性、自治心の向上においてであった。

「次からは、大人は口出ししないで欲しい。もっと自分たちだけで苦勞も努力もしていきたい」と言われた。

今回、野外活動を高校生を中心にして行なうことで、高校生は勿論、小中学生にまで、自主的に野外活動を行ないたいという意識がうまれたことは、評価できる成果であった。

今回の試みを終え、早速、高校生たちは、第2期の計画をたてはじめた。